



サハリン樺太史研究会
2020 年度活動報告書

2022 年 3 月 31 日
サハリン樺太史研究会

—2020 年度活動報告書—

目次

会長あいさつ

活動概要

例会・関連シンポジウム等

研究成果刊行物（付：参考資料 非会員による研究成果刊行物）

研究プロジェクト（付：参考資料 非会員による研究プロジェクト）

サハリン樺太史研究会会則・役員

報告書刊行について

本会は 2008 年 7 月に発足した。その後、例会開催、共同調査実施を重ね、さらに 2010 年には研究会誌を刊行、2011 年より公式 HP を開設し、研究会内外への発信にも力を入れるようになった。年度活動報告書も 2008 年度分から刊行し、2018 年度活動報告書は 11 冊目の年度活動報告書となる。

2011 年度分以降、参考資料として非会員の研究動向も日本国内限定ではあるものの掲載することとした。このことによって、日本国内のサハリン樺太史研究全体における本会の位置がより明確になろうし、また本報告書によって、完全にまでとはいかないものの、日本国内におけるサハリン樺太史研究の全体的動向を俯瞰することが可能になればと編者として願う。

なお、本報告書記載の情報の一部はインターネット上の情報を参照したものであり、若干の不正確さが残っていることがあり得ることをことわっておく。また、会員については本報告書編集時点で本会のメンバーリストに登録している者を指しており、当時は未会員であった場合もあることはご了承ください。

本報告書の 2017 年度版までに掲載された文献については、下記より検索可能であり、一部ではあるが英文書誌情報や要旨なども閲覧可能である。2018 年度分以降も随時掲載していく予定である。本報告書各年度版と合わせて、サハリン樺太史研究の動向を知るために役立てば幸いである。

サハリン/樺太史研究文献 DB

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311karafutoHIS2

2022 年 3 月 31 日

中山大将

(サハリン樺太史研究会世話人兼公式HP運営担当者)

—会長あいさつ—

サハリン・樺太は、前近代においては先住民を担い手とした、大陸側から千島列島にいたる海を介した交易ルートの一環であり、近代には日本とロシアの接触地域をなし、両国間で何度も国境線の引き直しと大規模な人口移動が繰り返された特異な歴史を有する島です。

この島の呼称も、幕末までは「北蝦夷地」とよばれ、明治初年から「樺太」とよばれるようになり、全島ロシア領有に変わると「薩哈噠」の3文字が当てられました。日露戦争後の北緯 50 度以南日本領有により、ふたたび「樺太」となり、第二次世界大戦後はサハリンと呼ぶことが一般的となりました。

近年、この島に改めて歴史研究の光を当て、この島の住民が幾世代にも亘って関わった歴史的経験を捉え直そうとする機運が日本、ロシア双方で高まりつつあります。また、日本とロシアとの研究交流は、今世紀に入り、活発に行われるようになりました。たとえば、北海道大学スラブ研究センターとサハリン大学を拠点として、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」第 5 回研究会「サハリン・樺太の歴史」(2004 年 7 月 29 日～30 日)、同第 11 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅰ)」(2005 年 9 月 21 日)、同第 13 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅱ)」(2005 年 12 月 3 日)、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」(2005 年 11 月 1 日～2 日、2006 年 2 月 16 日～17 日)、「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」(2008 年 5 月 6 日～7 日)と幾度も研究会が開催されてきました。そして 2008 年の「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」開催後に、シンポジウム参加者を中心に 2008 年 7 月、サハリン・樺太史研究会が発足しました(初代会長：原暉之北海道大学名誉教授)。

サハリン・樺太史研究会は、これまでの樺太史・サハリン史研究が日本、ロシアにおいて、それぞれ別個に行われてきたことを踏まえ、双方の研究成果を学ぶとともに双方の研究成果の交流、資料保存情報の交流などの研究交流を進め、「一国史」ととらわれないサハリン・樺太史を描くことを目標としています。

本会は札幌を拠点として研究会、シンポジウムを定期的に(年間 5 回程度)開催しております。これら研究会、シンポジウムは参加自由で、どなたでも参加できます。サハリン・樺太史の研究に関心をお持ちの方は、本会事務局にお知らせいただけましたら、案内メールを差し上げます。

2013 年 12 月 17 日

サハリン樺太史研究会会長 白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科教授)

—活動概要—

全国樺太連盟の解散

1948 年に設立され、樺太引揚者の援護事業や親睦、樺太史の叙述や啓発、史料保存等に尽力してきた全国樺太連盟が 2021 年 3 月に解散した。団体誌『樺連情報』に掲載されていた歴代樺太庁長官の事績を紹介した本会会員の鈴木仁らによる記事は『樺太庁長官物語』として一冊の書籍にまとめられ刊行された。また、2016 年に本会会員の中山大将や井澗裕らによって行なわれたサハリンに現存する日本人墓地等調査の成果の概要も、同誌上で発表された。なお、『樺連情報』縮刷版の最終巻も解散に合わせて刊行された。

サハリン樺太史関連博士論文

2020 年 9 月には鈴木仁が『樺太における郷土文化の形成と展開』によって、2021 年 3 月には『サハリン残留日本人の境界地域史』によって、同じく北海道大学大学院文学研究科から博士号を授与された。2019 年には、藤本健太郎が『1920 年代ソ連の対日政策：北サハリンを中心に』によって京都大学から、加藤絢子が『帝国法制秩序と樺太先住民：植民地法の制定・運用・判例への総合的分析』によって九州大学から博士号を授与されており、本会会員の研究の博士論文としての結実が続いている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響

新型コロナウイルスの感染拡大の影響が本格化する中で、世話人を始めとした会員たちも対応に追われ、例年通りの例会開催は困難になったものの、会場とオンラインによる例会の並行開催を実施し、ニコライ・ヴィシネフスキー著（小山内道子訳、白木沢旭児解説）『樺太における日ソ戦争の終結 知取協定』（御茶の水書房、2020 年 8 月）について、翻訳者の小山内道子が解説を行なった。

新規研究費の増加

会員である小川正人、加藤絢子の先住民族史に関する科研費が新規に採択された。また、非会員においても言語学や交流史の新規科研費も採択され各種研究プロジェクトが立ち上がった。

非会員の研究成果の増加

本会会員以外の研究者等による研究成果の刊行も増加しており、これら今後はこれら非会員との交流も重要な課題となると思われる。

ソ連占領初期南サハリン史料勉強会

兎内勇津流会員が主催するソ連占領初期のソ連公文書の勉強会は、引き続き活動を続けている。

(2020 年度末会員数:117 名)

—例会・関連シンポジウム等—

■ 第 58 回例会(共催)

日時:2020 年 12 月 19 日

場所:北海道大学学術交流会館第三会議室およびオンライン(Zoom)

報告 樺太における日ソ戦争終結と知取協定について小山内道子(翻訳家)

主催:NPO 法人ロシア極東研

共催:サハリン・樺太史研究会

北海道大学大学院文学研究院北方研究教育センター

—研究成果刊行物—

(五十音順)

■相原秀起……………近世史

【著書】

相原秀起『追跡間宮林蔵探検ルート：サハリン・アムール・択捉島へ』北海道大学出版会、2020年4月24日。

■東俊佑……………近世史

【定期刊行物】

東俊佑「北蝦夷地ウシヨロ場所アイヌの軽物上納」『北海道博物館研究紀要』6号、2021年3月
[https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2021/04/bulletin_HM_vol6_02_p011_050.pdf]。

■天野尚樹……………ロシア極東近現代史・北東アジア国際関係史

【定期刊行物】

天野尚樹「書評『樺太における日ソ戦争の終結：知取協定』」『神奈川大学評論』97号、2021年3月31日。

■井澗裕……………建築・都市史

【定期刊行物】

中山大将、井澗裕、テン・ヴェニアミン「樺太日本人慰霊碑の現状(三)西海岸地方」『樺連情報』844号、2020年11月1日。

■伊丹明彦……………ソ連史

【論文集】

伊丹明彦「北サハリン石油利権をめぐる米ソ協調：「ワシントン体制」論再検討のための手がかり」中西輝政編著『アジアをめぐる大国興亡史 1902-1972：中西輝政古稀記念論集』PHP 研究所、2020年9月3日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■加藤聖文 日本近代史

【著書】

加藤聖文『海外引揚の研究: 忘却された「大日本帝国」』岩波書店、2020 年 11 月 12 日。

■倉田有佳 来日ロシア人史

【定期刊行物】

倉田有佳「「尼港事件」第一報を日本に伝えた親日ロシア人 A. マケーエフ」『日口交流』301 号、2020 年 7 月 1 日。

■小林瑞穂 軍事史

【定期刊行物】

小林瑞穂「日本海軍の北樺太油田獲得と水路部: シベリア出兵期における北樺太測量を中心に (学園創立百十周年 史学科創設七十周年 記念特集号)」『史窓』78 号、2021 年 3 月 6 日。

■小林善帆 文化史

【定期刊行物】

小林善帆「樺太といけ花・茶の湯・礼儀作法: 高等女学校、博覧会、『樺太日日新聞』を通して」『いけ花文化研究』8 号、2020 年。

■シュラトフ ヤロスラフ 国際関係史

【定期刊行物】

シュラトフ ヤロスラフ「ロシア革命とサハリン: 日露関係から日ソ関係へ(1917-1922 年)」『スラヴ研究』67 号、2020 年 7 月 16 日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 鈴木仁 文化史

【著書】

鈴木仁『樺太における郷土文化の形成と展開』北海道大学大学院文学研究科博士学位論文、2020年9月25日[<http://hdl.handle.net/2115/80074>]。

鈴木仁、山名俊介『樺太庁長官物語』全国樺太連盟、2021年3月31日。

【定期刊行物】

鈴木仁「樺太庁による文化政策の展開：棟居俊一長官と樺太文化振興会」『北方人文研究』14号、2021年3月。

■ 谷本晃久 近世史

【著書】

藤井祐介編、大園隆二郎・谷本晃久監修『島義勇入北記(佐賀城本丸クラシックス1)』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2021年3月7日。

【論文集】

谷本晃久「金田一京助夫妻の近世アイヌ語辞書写本：北海道・滝川本とロシア・サンクトペテルブルク本と」『ロマノフ王朝時代の日露交流』勉誠出版、2020年8月。

【定期刊行物】

谷本晃久「千島アイヌと樺太アイヌ（アイヌをもっと知る図鑑：歴史を知り、未来へつなぐ）--（アイヌ史をたどる）」『別冊太陽』280号、2020年5月。

■ 兎内勇津流 ロシア史

【論文集】

兎内勇津流「ゲンナージー・ネヴェリスコイのアムール調査(遠征)と幕末の日本」東洋文庫・生田美智子監修、牧野元紀編『ロマノフ王朝時代の日露交流』勉誠出版、2020年8月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■中山大将 移民社会史

【著書】

中山大将『サハリン残留日本人の境界地域史』北海道大学大学院文学研究科博士学位論文、2021年3月25日。

【定期刊行物】

中山大将「日本領樺太における林業技術の開発と普及」『日本地理学会発表要旨集』2020年度号、2020年10月10日[https://doi.org/10.14866/ajg.2020a.0_117]。

中山大将「境界地域史研究資料統合活用計画：歴史研究者自身による個人目録のデータベース化とWeb公開」『日本植民地研究』36号、2020年6月30日。

中山大将「樺太日本人慰霊碑の現状(一)総論」『樺連情報』841号、2020年7月1日。

中山大将「樺太日本人慰霊碑の現状(二)鈴谷 亜庭 北部地方」『樺連情報』843号、2020年10月1日。

中山大将、井澗裕、テン・ヴェニアミン「樺太日本人慰霊碑の現状(三)西海岸地方」『樺連情報』844号、2020年11月1日。

中山大将裕、テン・ヴェニアミン「樺太日本人慰霊碑の現状(四)東海岸地方」『樺連情報』845号、2020年12月1日。

■パイチャゼ スヴェトラナ 教育学

【論文集】

パイチャゼ スヴェトラナ「サハリン帰国者の若い世代の顕在化する多言語使用とエスニック・アイデンティティの多重性」福永由佳編『顕在化する多言語社会日本：多言語状況の的確な把握と理解のために』三元社、2020年12月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

- 参考資料……………非会員による研究成果刊行物
- 【定期刊行物】会田理人「『樺太日日新聞』掲載スペイン・インフルエンザ関係記事：目録と紹介」『北海道博物館研究紀要』6号、2021年3月
[https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2021/04/bulletin_HM_vol6_05_p075-098.pdf]
- 【定期刊行物】五十嵐喜和「日本基督教会における「樺太伝道」について」『教会の神学』27号、2020年。
- 【著書】ニコライ・ヴィシネフスキー（小山内道子訳）『樺太における日ソ戦争の終結：知取協定』御茶の水書房、2020年8月。
- 【定期刊行物】大塚宜明「黒耀石からみた北海道およびその周辺地域における人類社会の動態」『札幌学院大学人文学会紀要』108号、2020年11月20日
[<http://hdl.handle.net/10742/00003314>]。
- 【定期刊行物】大塚宜明「黒耀石からみた北海道およびその周辺地域における人類社会の動態」『札幌学院大学人文学会紀要』108号、2020年11月20日。
- 【著書】大貫恵美子（阪口諒訳）『樺太アイヌ民族誌：その生活と世界観』青土社、2020年12月28日。
- 【論文集】小川正樹「海峡をはさむ華僑社会の活動の軌跡：北海道と南樺太、そして青森、秋田、岩手」曾士才、王維編著『日本華僑社会の歴史と文化：地域の視点から』明石書店、2020年4月15日。
- 【定期刊行物】尾曲香織「樺太引揚後の生活とその位置づけ：ある女性の回想から」『北海道の文化』93号、2021年3月。
- 【著書】梯久美子『サガレン：樺太/サハリン境界を旅する』KADOKAWA、2020年4月。
- 【著書】アナトーリー・グートマン（長勢了治訳）『ニコラエフスクの日本人虐殺：一九二〇年、尼港事件』勉誠出版、2020年4月10日。
- 【定期刊行物】阪口諒「樺太アイヌの流行病に関する伝承（緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究）」『口承文芸研究』44号、2021年3月。
- 【定期刊行物】阪口諒「アイヌ語樺太方言における斜格名詞の関係節化：場所を表す名詞が主名詞の場合を中心に」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』360号、2021年2月28日 [<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/109498/>]。
- 【定期刊行物】阪口諒「『アイヌ語ロシア語辞典』中のアイヌ語樺太方言テキスト」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』358号、2021年2月28日
[<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/109483/>]。
- 【著書】佐々木達夫編著『中近世陶磁器の考古学』雄山閣、2020年8月。
- 【著書】佐藤忠悦『南極に立った樺太アイヌ：白瀬南極探検隊秘話 増補新版』青土社、2020年4月。
- 【著書】佐藤哲朗『スパイ関三次郎事件：戦後最北端謀略戦』河出書房新社、2020年4月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

- 【論文集】清水保彦「日露歴史さんぽ⑦ユジノサハリンスク、コルサコフ」『ロマノフ王朝時代の日露交流』勉誠出版、2020 年 8 月。
- 【定期刊行物】城渚紗「外務省記録に見る「樺太残留者帰還請求訴訟」」『アジア地域文化研究』17 号、2021 年 3 月 31 日。[<https://doi.org/10.15083/0002002875>]
- 【定期刊行物】鈴木明世「現サハリン南部における日本統治期建造物の残存状況について」『北海道博物館研究紀要』6 号、2021 年 3 月
[https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2021/04/bulletin_HM_vol6_07_p111-125.pdf]
- 【定期刊行物】関根達人「北海道島における中近世陶磁器の流通」『東洋陶磁』50 号、2021 年。
- 【定期刊行物】武内優「仮説・雨情の樺太国境踏破考」『群系』44 号、2020 年 6 月 30 日。
- 【定期刊行物】中村和之「『諏方大明神画詞』の「唐子」をめぐる試論」『国際日本学』18 号、2021 年 2 月 26 日 [<http://doi.org/10.15002/00023759>]。
- 【定期刊行物】中村穂佳「立法情報 韓国 在サハリン韓国人の支援に関する法律の制定」『外国の立法 月刊版：立法情報・翻訳・解説』284-2 号、2020 年 8 月。
- 【定期刊行物】舟山直治「旧樺太における野草を活用した手工：1910 年代の大泊・留多加で行われた冬期の副業」『北海道博物館研究紀要』6 号、2021 年 3 月
[https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2021/04/bulletin_HM_vol6_06_p099-110.pdf]
- 【定期刊行物】麓慎一「明治維新时期におけるロシアのサハリン島政策」『ロシア史研究』104 号、2020 年 10 月 15 日。
- 【定期刊行物】麦倉哲「岩手県内の樺太引揚者のファミリーヒストリー（その 1）盛岡市編」『岩手大学文化論叢』10 号、2021 年 2 月 28 日 [<http://doi.org/10.15113/00015352>]。
- 【定期刊行物】やまだあつし「書評 楊素霞『帝国日本の属領統治をめぐる実態と論理—北海道と植民地台湾・樺太との行財政的関係を軸として(1895—1914)』」『現代台湾研究』50 号、2020 年 7 月 31 日。
- 【定期刊行物】渡邊香織「サハリン韓人の言語・文化教育の現状：サハリン韓国文化院の授業を中心に」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』358 号、2021 年 2 月 28 日 [<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/109484/>]
- 【著書】『樺連情報 縮刷版第 9 巻』全国樺太連盟、2021 年 3 月。
- 【著書】『昭和前期商工信用録 第 2 期第 4 巻 昭和 5 年』クロスカルチャー出版、2021 年 2 月。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

—研究プロジェクト—

(代表者五十音順)

■小川正人 先住民族史

[新規]小川正人(北海道博物館)「近代日本におけるアイヌ民族の〈社会への参画〉の歴史に関する基礎的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2023 年度。

■加藤絢子 先住民族史

[新規]加藤絢子(九州大学)「帝国臣民になることの意味：漁業権と日本国籍付与をめぐる樺太先住民族の政治的活動」科学研究費補助金・若手研究、2020-2023 年度。

■加藤聖文 日本近代史

[継続]加藤聖文(国文学研究資料館)「日ソ戦争アーカイブズ構築に関する日露共同研究」国際共同研究加速基金・国際共同研究強化(B)、2018-2021 年度。

■白木沢旭児 日本近代史

[最終]白木沢旭児(北海道大学)「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」科学研究費補助金・基盤研究(A)、2017-2020 年度。

■醍醐龍馬 外交史

[継続]醍醐龍馬(小樽商科大学)「近代国際関係における雑居地樺太：国境未画定の時代」科学研究費補助金・若手研究、2019-2021 年度。

■禰内勇津流 ロシア史

[継続]禰内勇津流(北海道大学)「シベリア出兵と東アジア国際環境の変動」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2022 年度。

■玄武岩 メディア学

[継続]玄武岩(北海道大学)「引き揚げと帰国のはざま：1950～1970 年代における日本への帰還」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2021 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

■ 藤本健太郎 外交史

[継続]藤本健太郎(東北大学)「戦前期サハリン島をめぐる国際関係史」科学研究費補助金・特別研究員奨励費、2019-2021 年度。

■ ブル ジョナサン 日本近代史

[最終]ブル ジョナサン(北海道大学)「The role of private charities in repatriation from the Japanese Empire」科学研究費補助金・若手研究、2018-2020 年度。

■ 参考資料 非会員による研究プロジェクト

[継続]太田満(奈良教育大学)「移民学習論の再検討:「残留日本人学習」の教材開発を通して」科学研究費補助金・若手研究、2018-2021 年度。

[継続]小口雅史(法政大学)「古代末期防衛的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2022 年度。

[新規]阪口諒(千葉大学)「アイヌ語樺太方言における動詞の数表示体系に関する研究:言語類型論の観点から」特別研究員奨励費、2020-2021 年度。

[継続]佐藤 丈寛(金沢大学)「古代ゲノム解析による東アジア:シベリア境界領域における人類集団の変遷の解明」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2023 年度。

[継続]佐藤正則(山野美容芸術短期大学)「サハリン在留日本人とその家族の越境のライフストーリー」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2019-2021 年度。

[新規]澤田和彦(埼玉大学)「近代日露交流史の諸問題に関する実証的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2024 年度。

[最終]中村和之(函館工業高等専門学校)「サハリンアイヌの総合的研究:その成立と変貌」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2017-2020 年度。

[継続]日比嘉高(名古屋大学)「帝国日本の書物流通ネットワークと知の文化基盤に関する調査および総合的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2019-2021 年度。

[継続]百瀬響(北海道教育大学)「北海道・東北と樺太におけるアイヌ・和人間の北方交易圏の実態研究」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2021 年度。

[新規]吉田さち(跡見学園女子大学)「在日コリアンおよび在樺コリアンにおける言語接触・方言接触に関する社会言語学的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2024 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

サハリン・樺太史研究会会則

2015 年 6 月 21 日改正

2011 年 5 月 28 日改正

2009 年 5 月 16 日採択

1. 本研究会はサハリン・樺太史研究会と称する。
2. 本研究会は、サハリン・樺太を対象地域とし、主として歴史分野に関する研究の促進と研究者の交流を目的とする。
3. 本研究会は、その目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - (1) 定例研究会(例会)・シンポジウムなどの開催。
 - (2) 共同の研究・調査、およびその成果の公開。
 - (3) サハリンの大学・研究機関との交流、情報交換および共同研究の促進。
 - (4) その他本研究会の目的を達成するために適当な事業。
4. 本研究会は、サハリン・樺太の歴史に関心があり、その目的に賛同し、事業に協力する個人の会員からなる。
5. 新年度最初の例会時に総会を開催する。総会は本研究会の最高議決機関であり、総会の議決は原則として出席会員の過半数によって成立する。
6. 本研究会には次の役員をおく。

世話人(若干名)・会長(1名)・副会長(1名)・事務局長(1名)。
7. 世話人は総会で選出し、世話人の互選により会長・副会長・事務局長を選出する。
8. 会長は本研究会を代表し、会務を統括する。
9. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
10. 本研究会に事務局をおく。事務局長は会長・副会長のもとで本研究会の事務全般を担当する。
11. 役員任期は2年とする。ただし再任はさまたげない。
12. 本会則は2015年6月から発効する。本会則の改正は役員議を経たのち総会の議決による。

サハリン・樺太史研究会役員(2020年度末現在)

2015年6月21日選出

2016年8月26日追加選出(*)

2017年7月22日追加選出(**)

会長：白木沢旭児

副会長：天野尚樹

事務局長：鈴木仁

世話人：池田裕子(**)、井潤裕、竹野学、兎内勇津流(*)、中山大将(*)

=====
サハリン樺太史研究会 2020 年度活動報告書

発行日：2022 年 3 月 31 日

編集者：中山大将

発行者：サハリン樺太史研究会

【公式 HP】 <http://sakhalinkarafutohistory.com/home.html>
お問い合わせは、上記 HP の問い合わせフォームよりお願いいたします。

=====